

対馬・国境マラソン応援ツアー添乗記

岩下明裕

対馬を応援しよう

2022年3月初旬、2年ぶりに対馬を訪問した。コロナの合間をぬったつもりだったが、まん延防止等重点措置期間にあたり、まちは閑散としていた。上対馬・比田勝のなじみの店はほぼ休業。かろうじて旧知の関係者たちから、現状の聞き取りをするのがせいぜいであった。比田勝から車で空港に向かう朝、幸いにも国境地域研究センターの団体会員ティースリー（株）代表の比田勝亨（ひたかつ・とおる）さんと話をする機会を得た。亨さんは、韓国と対馬を結ぶツーリズムを造成した草分け的存在であり、船会社の代理店やペンション経営など手広くビジネスを展開され、本センターのセミナーなどでも講師を務めてくださった方だ。

亨さんが、笑顔で言った。「いいニュースがありますよ。今年は国境マラソンが、2019年以来、3年ぶりに実施されます。そして、JR九州高速船の新造船クイーンビートル（全長84.5m、2582トン、定員502名）が博多港から日帰りで比田勝港まで運航されるので、自分も応援したい」と。



博多の国際ターミナルで待つビッグなクイーンビートル

国境マラソン。2014年と15年、（当時はあった5.5キロのコースに）センター理事の花松泰倫さん（九州国際大学教授）とともに走った思い出のイベントである。花松さんは当時、北海道大学の研究員であり、私と一緒におそろいの「JIBSN 北海道」のTシャツを着て走った。これはセンターのブックレット創刊号『国境の島・対馬の観光を創る』（北海道大学出版会、品切れ）とのコラボ企画でもあったが、この頃は、稚内、与那国、根室などでもセ

センターの会員が走り、「境界地域マラソン巡礼ツアー」をやったらどうだろうかと思面目に考えていた。

もちろん、高速船ビートルにも思い出がある。2012年11月、国際会議 BRIT（移行期の境界地域）第12回大会を福岡とブサンで開催したとき、移動のため、ビートルをチャーターし、厳原に入港、対馬バス5台で島を北上し、比田勝港から同じビートルでブサンへという旅を組織した。40か国200名が参加した会議のロジを担ったのが、花松さんと（いまは名古屋外国語大学准教授となった）地田徹朗理事だが、ビートルを使った福岡・対馬・ブサンという旅こそが、ボーダーツーリズムを思いつく原点である。

いうまでもなく、コロナ禍により、福岡・ブサン及び対馬・ブサンの国際航路はすべてストップ。2020年に進水したばかりのクイーンビートルももちろん就航できない。しかもこれはパナマ船籍にされていたため、国内への転用も不可能であった（これについては下村会員の[試乗記](#)が詳しい）。JR九州高速船には、本センターの団体会員として長年、ボーダーツーリズムを支援してくださった恩義もある。また何よりもボーダーツーリズムを再開できるとすれば、最初是对馬だろうとも私は考えていた。国境を越えない（が、境界地域のだいたいを堪能する）「内なるボーダーツーリズム」を再生する絶好のチャンスだと直感した。

わずか30分程度の比田勝亨さんとの会話だったが、思いが頭を巡り、すぐに提案をした。「ツアーをやしましょうよ。すぐにビッグホリデー（株）と相談します」。亨さんも即答で協力を約束してくれた。

マラソンを観る

私は「国境マラソン応援ツアー」の構想をすぐにボーダーツーリズム推進協議会会長の伊豆芳人会員及び同事務局のビッグホリデー（もちろん、センターの団体会員）に送り、東京に飛んだ。私はいつも（波照間と与那国をチャーター便で結ぼうといった）実現が難しい提案をぶつけるため、嫌がられるかなと予想していたのだが、伊豆会長、事務局メンバーも思いのほか好意的で、コロナ禍の突破口としてぜひこのツアーをやろうと賛成してくれた。とくに推進協議会の総会と懇親会（これも2年間中断）を福岡でやり、そのメンバーもツアーに参加するという伊豆会長の発案はツアー実現の可能性を高めてくれた。

すぐにセンターのMLなどを通じて、会員の参加を呼びかけた。実はツアーの直前まで詳しくは知らなかったが、札幌、長野、神戸、山口から4名の会員が申し込みをしてくれていた。自治体や観光業の推進協議会のメンバーも含め総勢10名に上り、飛行機がとれず、追加申込を断らざるを得ないほどであった。もっとも実際に走るのは私ひとりのようだったが。

かくてコロナ禍が始まってから、初のボーダーツアーの準備が整った。協議会のメンバーたちは前夜祭と称して、前日の6月24日（金）の夜、福岡にある対馬ゆかりの店で懇親を深めるという。だが私は金曜日の午前中は授業があるため、参加できそうもない。金曜日は翌日からのツアーに備えてひとり力を温存することにした。ツアーの行程はこうだ。6月25

日（土）に各自で空港に現地集合。10時過ぎのANAで対馬やまねこ空港へ。そこから専用車で、（オープンしたばかりの）対馬博物館、小茂田、和多都美などの神社を巡り、北上する。ガイドはこれも上対馬在住の会員の方が引き受けてくれていた。夜は比田勝のアナゴ料理に舌鼓をうち、銘酒「白獄」を飲む。

翌26日、応援ツアーの一行は、国境マラソンの開会式とスタートを見届けてから、比田勝亨さんの案内で、上対馬の名跡を巡る。夕方15時発のクイーンビートル臨時便（対馬初就航）で博多湾に戻り、現地で解散。実に境界地域のコンテンツ満載のツアーとなった。

実は私はマラソンに走るべく、亨さんと別れてから、すぐにトレーニングを始めていた。5.5キロの枠がなくなり、10キロ走らざるを得ないこと、またあれから10年近く過ぎており、体力に自信がなかった。登録の際の10キロ走破時間は2時間と書き込んだ（ほとんど歩いてでも完走するつもりだった）。マラソン実行委員会もコロナ後初の催しということもあり、慎重に準備を重ねていた。ランナー全員がPCR検査を22日に郵送し、事前に陰性証明書をダウンロードして受付時に提示しなければならないという。おかげさまで、時速7-8キロで走れそうな見込みもたち、PCR検査も無事陰性。あとは（今回は個人参加の）花松さんと3度目の対決（過去、私の2勝）を待つのみ。準備万端であった。

JCBS 代替ツアー

ツアー開始日の前日24日は荒天となった。福岡から対馬へ向かうフライトは最終便を除き、すべて欠航であった。どうやら対馬の天気がひどいらしい。だが明日は大丈夫に違いない。いままでの数あるボーダーツアーが出発中止になったことは一度もない。私は晴れ男だ、など根拠のない自信でみなが楽観していた。

朝、目が覚めるとニュースは午前中まで悪天候と繰り返す。ロシアや中国で（しばしば米国や欧州でも）ひどい目に遭い続けてきた、私はいやな予感がした。朝の一便もすでに欠航。私たちと同じ10時05分発の二便で行くはずだった花松さんからLINEが届く。自分は夕方の便に振り替えた、ツアーはどうするの？

私ひとりなら小回りも効こう。だがこれは団体旅行である。もし飛ばなかったら、ツアーはキャンセルになるかもしれない。そのときは熊本の実家にでも行こうか？ 天神のホテルから空港で地下鉄に向かう間、いろいろ思案し始めていた。地下鉄を出ようとする、山口から参加したメンバーと偶然会う。初対面なのだが、オンラインで私の顔を覚えていて声をかけてくれた。一緒にロビーへ向かう。チェックインは個別と言われていたが、この状況を鑑み、ロビーにいるビッグホリデーの添乗員に会うべきだろうと考えた。

エスカレーターを上がりながら、携帯の運行状況をチェックする。これまでの「天候調査中」が「欠航」へと変っていた。出発のボードにはキャンセルの文字が光っていた。

Departure Flight Information
출발 비행 정보 高境航班信息

時刻	発着時刻	行先	機名	航空会社	搭乗口	備考
10:05		成田	GK502	JAL	JAL6044	搭乗手続き受付中
10:05		対馬	ORC81	JAL	ANA4681	搭乗手続き受付中
10:10		東京	ANA246	JAL		欠航(雷のため)
10:10		仙台	IBX13	JAL	ANA3113	搭乗手続き受付中
10:15		名古屋/中部	SFJ58	JAL	ANA3858	搭乗手続き受付中
10:35		東京	SKY8	JAL		搭乗手続き受付中
10:55		宮崎	JAL3625	JAL		搭乗手続き受付中
11:00		名古屋/小牧	FDA304	JAL	JAL4404	搭乗手続き受付中
11:00		東京	JAL310	JAL		搭乗手続き受付中
11:10		東京	ANA248	JAL	DLH4877	搭乗手続き受付中
11:15		静岡	FDA144	JAL	JAL3813	搭乗手続き受付中
11:25		札幌/新千歳	APJ455	JAL		搭乗手続き受付中
11:30		小松	ANA1234	JAL		搭乗手続き受付中
11:35		成田	GK504	JAL	IAI 6046	搭乗手続き受付中
11:40		札幌/新千歳	JAL3513	JAL		コードシェア便
11:40		いわて花巻	JAL3523	JAL		搭乗手続き受付中



福岡空港の欠航案内／ボーダーツーリズムの旗を引き継ぐ（撮影：高田喜博）

昨日からの欠航続き、明日のマラソン客などの利用など考慮すると、10人の団体を次の便以降に振り替えるのは現実的ではなかった。また（結果として次便から飛んだが）この時点では次便以降も天候調査中、福岡に引き返しの条件付きなど可能性は高くなかった。実際、個人手配の花松さんも18時の最終便に振り替え、これに賭けていた（結果的には、その前の便で行けた）。

また対馬空港到着が遅れば、結局、この日は観光できず、2時間ほどかかる比田勝に移動して宿泊だけとなってしまふ。ツアーの趣旨はもはや成立せず、キャンセル扱いにせざるをえない。この旅行会社の判断は当然だろう。

だが私は考えた。ここに参加している4人の会員はおそらく私のMLでの呼びかけをみて参加して下さったに違いない。訊いてみたところ、彼らはみな対馬に行ったことがなく、このツアーを楽しみに各自で福岡に集まったようだ。遠くは私と同じ北海道から、もちろん明日日曜日のスケジュールは空であろう。

代替案をビッグホリデーの関係者と相談した。ひとつは港にタクシーでいって厳原行きのフェリーに乗る。だがすでに時計は9時半を回っており、10時発のフェリーには間に合わない（壱岐経由で厳原に14時45分着）。10時半発（壱岐経由だが12時45分着）の高速船もある。とはいえ、昨日からの欠航続きで、みなが港に殺到し、席を確保できる保証はなさそうだ。何より、この天気である。荒天の玄界灘の航路は厳しい。私はかつてビートルの船上で何人もが床に転がっている光景を見てきた。「ゲロゲロ」の旅には相応の覚悟がいる（花松さんがあくまでクイーンとはいえ、ビートルを回避し、往復とも飛行機にしたのは

それ)。難題はまだある。仮に船で厳原に着いたとする。そこから比田勝までどうやっていくか。本数の少ない路線バスで約3時間。比田勝着は夕方だろう。路線バスだから観光などできはしない。レンタカー？ それでも2時間はかかるし、帰りにビートルに乗れなくなる（比田勝から厳原へのレンタカーの回送はとて高額）。

いずれにせよ、今日対馬にいったところで、宿泊（せいぜい夕食）以外のアクティビティはほぼ不可能である。とすれば、方法はただひとつ。明日の早朝、マラソンランナーと一緒にビートルで行って、日帰りすることだ。幸いにもクイーン号の定員は約500人。まず乗れる。ネックは朝6時発なので、4時半起床、5時半までにチェックインすること。私は躊躇なく、会員みなさんにこの日帰りツアーを提案した。驚くことに（いや予想通り！）4人全員が行くと即答。これで決まった。ビッグホリデーも動く。

まずJR九州高速船に連絡を入れ、帰路のみの予約を往復に変更。亨さんに電話。人数は減るが、岩下も入れて5人で行くと伝える。この日の夕食が予定されていたおかべ食堂には、急遽、明日のお昼のアレンジを依頼。迅速な対応はさすがプロであった。

こうして即興のJCBS代替「国境マラソン応援ツアー」が出来上がった。今日はここで解散。ただし夜は、札幌在住の会員を（いまはなき箱崎の九州大学の正面にある）ちゃんこ御島にお誘いし、前夜の打ち合わせを行った。

対馬・比田勝一日游

朝5時過ぎ。博多湾国際ターミナルに着くと、ランナーの方々が受付に並んでいる。私もランナーだから、PCR検査陰性証明書をみせ手続きをする。ただビートルの切符は当日購



豪華なビジネスクラス
(撮影：海老名健司)

入なので別の窓口へ。「先生」と声がかかった。なんとJR九州高速船の水野正幸社長が自ら受付を手伝っていた。ビートルにも同乗するという。社長自ら陣頭指揮にたつほど、今回の企画は会社としても熱が入っているのだろう。

乗客はほぼ全員がランナーであるから、ターミナルに入るやいなや、陰性証明書を出せ、この列に並べと係員に誘導される。え、会員のひとりが並んでいる。あ、走らないから、並ばなくていいよ、こっちで切符買ってとさっそくご案内。走らないのに、ビートルに乗るなんて、きっと私たちぐらいだろう。ビッグホリデーから預かった「ボーダーツーリズム」の旗を片手に、ツアーの道中、添乗員をする。「JIBSN 北海道」のTシャツを着てランナーの恰好をしていたが、心のなかで自分にそう言い聞かせた。

クイーンビートルは豪華な船だ。まずでかい。そして美しい。窓が大きく景色が楽しめる。小型のビートルのときはシートベルトをして船内移動も不自由。ましてや外など出られなかったが、なんとデッキにも出られるという。トイレもきれい。売店もというよ

り、これはカフェである。ブサン便のときに免税店となるショップにはおみやげが並んでいた。社長の案内で、ビジネスクラスも見学できたが、まるで飛行機のキャビンだ。小型のビートルと比べて、スピードがやや遅いのが難点だが、居住性や快適さは比べものにならない。豪華な客船を使うことで、苦痛でしかない福岡からブサンに行く LCC による移動との差別化を狙っているのだとすぐに理解した。

でも朝 6 時だから眠い。酔い止めのアネロンを飲んだから、さらに眠い。到着予定の 8 時 45 分まで熟睡のはずだったが、ふと目を開けるともう比田勝港だ。時計を見ると 8 時 15 分。え、早着と思いきや、ここからが実に長かった。ゆっくり船が向きを変え近づくがなかなか接岸しない。船が大きすぎる。リハーサルで一度、接岸したときも大変だったという。進行方向のまま入って右舷付けをすれば早いのだろうが、反対に回って左舷付けしなければ、タラップが装着できないと聞いた。そのタラップも福岡からもってきたとのことだが、とても長くて揺れる。一度に多くがのれず、乗客ひとりひとりが下りるのもゆっくり。結局、私たちが降りたのは 9 時。スタートは 9 時半だから、ランナーたちはバスへと急ぐ。私たちも比田勝亨さんのバンに乗り込んだ。

福岡や長崎から対馬に向かう観光客で比田勝から入るケースはまれであろう。しかも一日遊だから、上対馬しか滞在しない。日本人で対馬に行くとき、厳原や万関橋、和多都美神社を観光しないケースはほとんどないだろう。会員の一人が言った。いやあ「勝手口」から最初に入るのは面白いですねえ。私と亨さんはこう答えた。ユーラシア大陸や朝鮮半島からみたら「ここが玄関ですから」。朝鮮通信使も上対馬から始まる。

不死身のボーダーツーリズム

会場受付でゼッケンと参加記念の T シャツをもらう。花松さんと合流し、比田勝尚樹市長にご挨拶。私がスタートだけ参加して、あとは棄権すると伝えると、花松さんが寂しそうな顔をする。10 キロコースが 9 時半スタート。号砲が鳴る。花松さんと一緒にボーダーツーリズムの旗を掲げて最後尾から疾走する。目の前の坂をかけたのぼると東横インだ（おそらく昨夜は（2019 年の）オープン以来、初めての満室だったろう。駐車場がこんなに車であふれている光景を始めてみたと地元との誰もが口にした）。だが私は道端の応援が手薄になった駐車場の陰から身を隠すように一人で離れ、ゼッケンを外す。何事もなかったかのように応援客の顔をしてスタート地点に戻り、棄権を受付に告げた。



マラソンの風景 (撮影：井出晃憲)



(撮影：吉田浩正)

9時45分スタートのハーフマラソンの号砲を聞いて、4人と一緒に亨さんのバンへ向かう。さあ、添乗員をやろう。

バンはマラソンランナーをゆっくりと後ろから抜いていく。最後尾の年配の男性がゆっくり歩いている。ハーフは関門が3つ設けられ、最後の関門(16キロ地点)を160分で通過してゴールしなければ収容される(記録によると収容者が4名)。「おじいさん、こんなペースで大丈夫かいな」。リタイアした人間は気楽である。バンは比田勝のまちなかを抜けていく。応援の人波(というほどいないが)とランナーたちを抜いていく。10キロのコースはまちなかに折り返し点があり、早い人たちはもうこちらに向かって駆けてくる。「おー、花松。早いじゃあないか」と声上がる。私たちの声援も届いたのだろう。彼は1時間12分の好タイムで完走した。ちなみに今回のマラソン参加者は国内だけの646名(前回は1,178名。うち韓国から532名)。私は二番手の遠距離登録者だったようだ。

会員さんはみな初対馬だから、定番の観光コースを巡ることになった。まずはヤマネコ。対馬野生生物保護センターでは生ヤマネコを見られる。一同、興奮。次は西海岸の「異国が見える丘」を回って比田勝へ。霧があつて残念ながら今日、韓国は見えなさそう。11時半すぎ、早いお昼は。おかべ食堂。以前は「ひでよし」の名前で知られたこの店は、とくにアナゴの旨さで知られている。朝早い出発だから、みならず朝食は食べていない。空腹に銘酒「白獄」が染みわたる。みな、美味しすぎるアナゴづくしに満足したようだ。



あなごづくし おかべ食堂の絶品 (撮影：海老名健司)

昼食後は、韓国展望台へ向かう。亨さんから、ヒジキ漁の説明を受けながら、展望台にたつと。おお、韓国が見える。初対馬で見えるとは、日ごろの行いがいい人が多いのだろう（行いの悪い私は初めて見たのは3回目）。強風が霧を吹き飛ばしたようだ。その後、近くの豊砲台跡へ。地元の歴史家が「東洋のナポロン」と呼ぶその風景は迫力満点。



豊砲台跡（撮影：山本悟）



集合写真：殿崎の対馬沖海戦の記念碑にて

最後に、対馬沖海戦の碑がある殿崎へ。亡くなったロシア兵ひとりひとりの名前が刻まれた記念碑をみながら、地元・西泊の方々が150人くらいの傷病兵を手当てし、無事、本国へ帰還させたこと、ここで毎年、慰霊祭が開かれ、アフアナシエフ大使らも訪れたこと、プーチン大統領が来日するときここに来るように（私が）手紙を渡したことなど、いささか懐かしく、日露関係に夢があったころのエピソードを披露した。

14時過ぎ、バンは比田勝港へ。亨さんにお別れを告げ、会員3人の方と船に乗り込む。あとひとりいたのでは？ 亨さんと意気投合し、急遽、厳原行きをやめて、亨さんのみうだペンションに泊まるそうだ。今夜はまたアナゴを食べるのだろう。うらやましい。

比田勝のこのターミナルは国際線用だから、国内便のときは建物横のフェンスから乗り込む。ちょっと危ない雰囲気もあるが、JR九州高速船の社長が自ら切符をもぎっている。横では、中断している福岡・ブサンの国際線の対馬寄港（混乗）復活を呼び掛けるのぼりを市議がもってアピールしている。船は静かに動き出した（今回のクイーンビートル乗船実績は、博多発129名、比田勝発149名：対馬市資料より）。



再見！ 国境マラソン

私の記憶はここで途切れている。3時間後、博多港でみんなと別れ、長すぎる一日が終わった。2019年秋の礼文・稚内をめぐる「内なるボーダーツーリズム」以来、コロナ禍で途絶えていた旅がまがりなりにも復活した。旅行会社が主催できない状況が生まれても、私たちのNPO法人にギブアップはない。境界地域を旅したい人がいる限り、道は必ず開かれるからだ。

今回の急ごしらえのツアーを支援してくださったビッグホリデーのみなさま、亨さん、岡部さん、JR九州高速船の方々、そして何よりも3年ぶりの国境マラソンを実行した上対馬のみなさんに心よりお礼申し上げます。

とはいえ、私のなかにはいま忸怩たる思いがある。「国境マラソン応援ツアー」を曲がりなりにも実現できたことで、亨さんとの約束は果たせた。ボーダーツーリズムの復活も喜ばしい。他方で、準備してきたにもかかわらず、マラソンを完走できなかったという達成感のなさからか、福岡に戻った夜、私は寝付けなかった。花松さん、今年は私の不戦敗になったけど、今日から一年間トレーニングして来年リベンジに戻ります。そのときは、なにとぞよろしく！

(2022年6月26日)